

〔Ⅲ〕 高校文化祭について

白 井 宏

1. はじめに

毎年恒例として行われる行事を、マンネリズムの傾向から救い出すことは、至難である。文化祭の担当を1年間やってみて、最も痛切に感じたのは、このことである。個々の生徒にとっては、青春のひとこまにおける、かけがえのない貴重な経験であり、われわれはその、感動の演出家でなければならない。そういう認識でスタートしたつもりではあるが、果してどれほどのことがやり得たか。

以下、筆者自身の所感をまじえながら、1年間のまとめをレポートしてみたい。

2. 1年間の経過の概略

- 4月25日 第一回文化委員会
委員長・副委員長決定。先輩から一言。
- 4月28日 これからの活動方針についての話し合い。
高1に対する文化祭についてのガイダンスをどうするか。
- 5月4日 高1の各教室を、2・3年生が説明してまわった。
以後中旬にかけて、中学校が小文化祭をやる時に、高校はどうするかについて考え、話し合う。
- 5月20日 統一劇場の人が来校され、文化委員でお話を伺う。
- 5月25日 統一劇場の『帰郷』を、全体での鑑賞行事にするかどうか。するならどのように進めて行くか、について検討を始める。
- 6月中旬 テーマ案決定。
文化祭のプログラムについて考え始める。
各種の企画についての検討を始める。
- 7月上旬 『帰郷』鑑賞行事断念。
- 7月11日 文化祭での映画についてのアンケート集計。
- 7月12日 文化祭プログラム原案を、議会に提出。
11月2日3日の日取りは可決。
テーマは、各クラスへ持ち帰り。
- 7月13日 第一・二分科会の企画承認。
テーマ修正可決
- 7月20日 講演講師についてのアンケート集計。
1. 手塚治虫 2. 浦山桐郎 ……

各企画の係分担決定。

- 8月16日 映画『いちご白書』に決定。
手塚治虫氏断念。
- 9月9日 プログラム案承認。
講演講師 浦山桐郎氏決定。
当日外来者の扱いについて検討し始める。
- 10月5日 浦山氏の都合によるプログラム修正案承認。
- 10月26日 外来者の扱い(招待状制)決定。

3. 当初の問題意識

4月、文化委員会の発足に先立って、本校における文化祭という行事の最近の傾向(それは何もひとり本校のみにあてはまるものではないが)を、次の2点に整理してみた。

(1) 行事内容が、次第に低俗化・安易化してきているのではないか、ということ。

文化祭(行事)は息抜きだ、授業が無くなるから楽しい、などの意見に象徴されるような傾向は、決して小さいものではない。文化祭というものを、「文化」の方でなく、「祭」の方へ重点を置く考え方である。

これには、いくつかの原因が考えられ、ただ生徒の無気力を云々すればそれですむという問題ではない。1つには、つい易きにつき、低きに流れやすいという人間本来の弱さがある。2つには、厳しい受験体制からくる、勉強第一という考え方である。これは、教師や学校の側にもある。そして3つには、テレビを代表とする、楽しければよいという、安易で軽薄な文化状況がある。

ほかに、いろいろと考えられるだろうが、これらの原因が重なり合って、文化祭の内容を、低調にさせているように思う。

(2) 文化祭に、積極的に参加しようとする生徒が、次第に減少してきており、その一方で、そういうメンバーが、一部の生徒に固定化しやすいという現象である。

これは、第1の現象ともおおに関係のあることであるが、文化祭や他の行事に対してだけでなく、すべてのことに対して、積極的な情熱を見せる生徒が少なくなっている。はやりのことばで言えば、シラケているのである。一方、少数の、かなり積極的な生徒は、文化祭や他の行事においてだけでなく、クラスで

の活動や、生徒会活動、部活動等においても、それなりに活発にやっている。つまり、やる生徒は、いろいろな方面でがんばっているが、やらない生徒は、どの面においても消極的、そういう現象をも現出しているのである。

生徒の、主体的・自主的活動が、比較的大幅に保証されている、数少ない分野として、そして、かなり多くの生徒に、それなりの期待感が持たれている(米山論文参照)文化祭という行事を、どのようにして「文化」的な行事として創造して行くか。それがわれわれの課題である以上、今述べた2点の克服を旨ざすことが、その目標に近づくための一方途になり得るのではないか。それが、当初の考え方であった。

4. 内容を高め、まとまりあるものにするために

発足第1回目の文化委員会において、次の2つの点について話をし、考えさせた。

(1) 18名の文化委員は、心と力をひとつに合わせなければならない。

各クラスから2名ずつ選出された文化委員は、自ら立候補した者もあるかもしれないし、自分の希望とは別に選ばれた者もあろう。しかし、その選出の事情はともかく、文化委員となった以上、悔いの残らぬように活動しなければならない。そして、文化委員会として何かをやりとげて行くためには、まずこの18名が、何よりも「仲良し」にならなければならない。クラスに根ざしながらクラスを超え、学年を超えて、ひとつの運動体としてのまとまりと、エネルギーを持つようにならなければならない。

(2) 文化委員は文化祭委員ではないということ。

文化祭は、確かに大きな行事であり、文化委員会として、総力を挙げて取り組まなければならない。しかし、その文化祭という行事をたんに消化することだけが、この委員会の仕事ではない。文化というもの、もっと限定して、本校における文化というものをトータルに捉えて、それを豊かにさせて行くという視点を持ちたい。そういう考え方や活動の中核になり、その集大成として、秋の文化祭を成功させたい。

さてその結果であるが、(1)については、まずまずであったと言えよう。一年生の委員の中から、若干の脱落者は出たが、二年生の委員を中心に、割合よくまとまり、それぞれの力量を発揮し、それを結集し得たように思う。特に、三年生委員のがんばりは特筆すべきであった。目前に大学入試を控えながら、時に二年生以下をリードして行くというような場面も何回か見ら

れたのである。これには、委員長・副委員長以下二年生の委員6名が、すべて女子によって占められ、反対に、三年生の委員は、6名すべて男子であったという、やや変則的な構成であったこととも関係があったかもしれない。「おれたちがやらねば」という俠気を、三年生が発揮したのであろう。

(2)については、先ず、文化祭以外の文化的行事への取り組みは、2度観劇行事に取り組んだのだが、結果的には、2度とも成功しなかった。

1度目は、統一劇場の『帰郷』、2度目は、新制作座の『泥かぶら』である。何れも、劇団の人が来校されて、文化委員会で話をされた。その段階では、委員会としては相当な関心を持ち、実現したいと考えたのだが、結局、各クラス、全校を動かして行くところまでは行かなかった。卒直に力不足を認めなければならぬ。何と言っても、秋の文化祭という行事が重たくのしかかり、それ以外のことにあまりエネルギーを傾けていると……という不安もあったのであろう。

文化祭を「文化」的に高め、よりまとまりあるものにするためにということでは、テーマを作ろうという考えが出てきた。従来も、テーマを持った文化祭は、2度ほどあったが、本年は、テーマ設定の意味というものについて、次のように考えた。

先ず、行事の焦点として、テーマを考える。つまりただ単にテーマがあるというだけでなく、文化祭全体が、そのテーマによって、まさに統一されている。すべての企画がテーマを意識して、テーマに沿って計画される。そういうテーマにしたい。そうすることによって、前記の目的が達せられるのではないかということである。

次に、単にテーマを作ることだけを重視するのではなく、そのテーマを決定して作くための、途中の討議をも大切に、そこにも意味を見出して行こう、と考えた。文化委員会としてテーマ原案を考え、生徒協議会、各クラス、クラブ、サークル、全校生、ときさまざまな段階の大衆討議を経る過程で、テーマそのものを練り上げて行く一方、その事を通して、文化祭への関心を高め、広げて行こうと考えたのである。

さて、文化委員会においては、たまたま本年度が、本校創立三十周年目にあたることを踏まえて、ひとつの節目であるので、自分たちの歩いてきた道を、一度ふり返ってみよう、そういうことを中心の思想にしようというわけで、「ふり返ろう! 青春の軌跡を」というテーマ原案を作った。(これには、筆者や、生徒部の教師達の助言の影響も大きくあった)単に母校の歴史をふり返るというだけでなく、多忙な日常生活やテスト、受験などに追い立てられている毎日の中で、時には一度立ち止まり、自分達の歩いてきた道程をふり返

り、考え直してみよう、そういう精神であった。

ところがこのテーマは、生徒協議会、クラス討議を経る過程で、「見つめよう！青春の軌跡を」という形に修正された。テーマの精神は承認されたのだが、「ふり返ろう」ということばが、後ろ向きで、あまり若者らしくないという理由であった。

このことは、生徒よりも年をとっている教師たちの精神の姿勢（「ふり返ろう」の辞句の提案は筆者であった）が批判されたとも言えるし、テーマに関して、それなりに真剣に討議させた結果とも言える。何れにしても、高く評価できる修正であったと、筆者は考えている。

しかし、そのようにしてできあがったテーマが、期待したような役割を果たしたかという点、決して満足できるような結果ではなかった。すべての行事内容が、テーマの精神に沿っていたとは決して言えず、無理矢理形式的にテーマと関連づけたものも、中にはあった。

まとめて言えば、高校報道局による「本校の歩み展」や、文化委員会主催の、講演、映画、第一分科会、合唱コンクール、各種作品コンクールなどに、いくらかずつ、テーマとの関連性が認められたというところであらうか。

さらに、当初は、単に文化祭のテーマというだけでなく、1年間の文化活動全体のテーマとして考えたいと思っていたのだが、そのねらいも十分に達せられたとは言えない。来年度以降に期したいところである。

5. 積極的参加を促すために

この点に関しては、いろいろな面でコンクール形式を採り入れてみよう、ということになった。そうすることによって、個人、グループ、クラス等の、行事参加意欲、文化的関心を掘り起し、集約して行こうということをおねらったのである。以下各企画個別に略述してみる。

(1) 合唱コンクール

この企画は、ここ数年来継続して行われてきているもので、文化祭における企画としては、かなり定着してきているものと考えられる。

参加はクラス単位で、企画運営は、文化委員会と、合唱コンクール審査委員会（メンバーは各クラスより選出）との協同によって行われた。

各クラスの曲目は次のようであった。

- H 1 A 「風になりたい」・「空に星があるように」
- H 1 B 「さらば青春」・
「あの素晴らしい愛をもう一度」
- H 1 C 「旅人よ」・「翼をください」
- H 2 A 「小さい秋みつけた」・「はるかな友に」

- H 2 B 「涙をこえて」・「遠くへ行きたい」
- H 2 C 「メロディフェア」・「種と泉」
- H 3 A 「海の若者」
- H 3 B 「生命の歌」・「おおシャンゼリゼ」
- H 3 C 「ファッショナブルラバー」・
「行こうふたたび」

曲目の選定には、テーマを意識した跡も見受けられる。また、練習にも各クラスとも相当時間をかけ、学年、クラスによるデコボコも見られはしたが、三年生を頂点として、内容的にはかなり程度の高いコンクールになったのではないかと思う。

(2) クラス 8mm コンクール

本年初めて計画したもので、果してうまく行くかどうか、不安もあったが、まずまずではなかったかと思う。

- 企画運営 — 文化委員会と、クラス 8mm 審査委員会（メンバーは各クラスより選出）。
- 参加主体とねらい — クラスを参加主体とした。又、クラスが、そしてクラスを通して全員が積極的に文化祭に参加すること、クラス意識を高めること、自分たちの存在をレンズを通して見つめなおすこと、などを主なねらいとした。
- 撮影規定 — フィルムは、本部より 3 本ずつ各クラスへ支給。クラス負担で上積みも可。サウンド 8mm は使用しない。
- 審査規準の項目 — テーマ、構成、表現力、撮影技術。

以上のような要領で実施したのだが、内容、技術面でのクラスによるアンバランスが目立ち、さらに、クラスの全員が何らかの形で製作に参加するようにという、文化委員会の希望は達せられないクラスが多かったようである。

しかし、それらは、本年が最初の試みということで次年度以降に期することにして、9 クラス中 8 クラスが参加したこと、中にはかなり高度の作品があったことなどに対して、一応の評価をしておきたい。

作品は、学校で保管し、希望に応じて、クラスや個人に貸出すことにしている。

各クラスの作品名は次の通りである。

- H 1 B 「紙ヒコーキ」
- H 1 C 「太陽にほえろ」
- H 2 A 「THE PARODY」
- H 2 B 「どっきりカメラ」
- H 2 C 「白い終止符」
- H 3 A 無 題
- H 3 B 無 題
- H 3 C 「まあ いいやあ」

(3) 各種作品コンクール

イラスト、絵画、手芸、写真、文芸の五部門で、作品コンクールを行った。このような試みも、かつて企画されたことがなかったわけではない。しかし、なかなか成功しなかった。作品が集まらないのである。

そこで、文化委員会では、次のように考えた。各個人個人は、何らかの意味での文化的関心、意欲を、必ず持っているはずだ。ある生徒は小説を書き、ある生徒は詩を作り、ある生徒は写真が好きで、ある生徒は手芸が得意で……。本校は幸い小規模校であり、生徒数も少い。各文化委員は、誰がどういうことに関心を持っているか、誰がどういうことを得意としているか、そういう知識や情報を、できるだけたくさん集めよう。そしてそういう人達に、出品してくれるように個人的に働きかけよう。ポスターを貼り、皆の前で呼びかけているだけでは、作品は出てこない。だから、クチコミと、個人的依頼を強力に押し進めよう、ということにしたのである。

イラスト部門	18点
絵画部門	9点
手芸部門	14点
写真部門	23点
文芸部門	17点
合計	81点

その結果集まったのが、以上の通りである。全校生徒数が約400名ということを考えても、出品点数は、決して多いとは言えない。

しかしともかく、これを第一歩として、学校全体の文化的雰囲気や、育て、高めて行きたいと考えている。

各部門毎に優秀作品を選び、金賞、銀賞を決め、さらに5つの金賞の中から、最優秀作品を選び、文化祭大賞を与えた。審査は、各関係教科の教師を中心に依頼して行った。そして、文芸部門では、全作品を収録した作品集を作製し、他部門の作品は、当日会場を設営して展覧した。

6. その他

(1) 3つの柱

文化祭への参加主体として、3本の柱を考えた。個人、グループ、クラスである。

そのうちグループは、さらに、部、クラブ、サークル、任意のグループなどに分類される。そしてここに、主として2つの問題を感じており、今後の課題とした。1つは、運動系の部をどのような形で文化祭に参加させていくかという問題である。傍観者になりやすい部分である。もう1つは、任意のグループの問題である。このグループが、主としてバザー等の主催者となる。いろいろな考え方があろうが、筆者は、少

なくとも食品バザーは基本的に文化祭にはふさわしくないと考えている。第一日常活動の積み重ねを発表するという性格が薄い。

(2) 中学校との関係

本校において、中学校と高校は、同一キャンパスにあり、同一教官組織の下にあり、同一施設を使用している。しかし生徒会組織は別であり、高校入学試験がある。さらに部活動においては、大部分は別々に活動を行っているが、一部合同で活動している部もある。このような複雑な事情が、文化祭という行事にも、微妙でさまざまな影響を与える。ともすれば高校の陰で無視あるいは軽視されがちな中学校、反対に、いつも中学校を幾何か意識していなければならない高校。これを弱点としてでなく、中高両方持っていることを利点とするような発想を持ちたいと思うのだが、問題は簡単ではない。

(3) 文化祭実行委員の位置

本年初めて、有志の希望者による文化祭実行委員が、文化委員会を助ける形で登場した。予想外によく働いてくれただけに、今後きちんとした位置付けと役割をして行くことが必要である。本年は、完全な下請け機関として、いわば雑用係というような役割であった。

(4) 教師参加の問題

本年は、直接指導の任にあたった生徒部の教師だけでなく、他の全教師が、分科会の主催者、助言者、各種のコンクールの審査員、賛助出品者、バザーの顧問などという形で、かなり積極的に参加した。

教師の指導性と、生徒の主体性・自主性尊重との調和というのは難しい問題であるが、教師の参加によって行事全体に活気が出るのは事実である。

7. おわりに

本年の初めての試みを中心に、文化祭の概略を述べてきたが、他の学校のための参考になるような行事ができあがったわけでは、決してない。前書にも触れたように、われわれ教師にとっては例年のことであり、生徒にとっては入学して初めての、中心になって行う1回だけの、高校生活最後の、それぞれ貴重な経験である。そのことがすべての課題の原点であると思う。可能な限り新鮮な気持ちで生徒に接し、文化の香り高い行事を創造して行きたい。

本年の文化祭のプログラムを掲出して、本稿を終えることにしたい。

<プログラム>

11月2日(水)		11月3日(木)	
体育館	教室	体育館	教室
開会式		連絡・注意	
㊥合唱コンクール	㊤第1分科会	講演 浦山桐郎氏	
㊥㊤第2分科会		映画「いちご白書」	個人発表 展 示 映画「いちご白書」(視聴) ㊤(社会科教室)クラス8冊
昼食		個人発表	
㊤合唱コンクール	㊥文化講座その1	14:30... 14:40	
	片づけ・移動	15:00... 15:15	各教室後片づけ
	㊥文化講座その2	15:15... 16:00	
		閉会式 ・合唱コンクール 優秀クラス演奏 ・表彰式 ・閉会式	
		後片づけ	

〔IV〕 保健室における生徒の実態について
第二報現状の分析

今 治 富 美 子

1. はじめに

前回¹⁾保健室の実態についてのあらましを述べた。その中で気付いた保健室における問題点をさらにほりさげ、それらの問題点がどのようにして起るのかをつかむために、現状の分析を試みた。

1) 紀要 21 集

2. 方 法

昭和53年1月11日から18日までの土、日、祭日を除く5日間、養護教諭(筆者)の行動分析を記録とテープレコーダーによって行ない、また利用者の利用状況をアンケートを含む調査によってできるだけ客観的に検当した。

3. 結 果

(1) 養護教諭の行動分析

結果は表一Iの通りである。ここで示した教値は、5日間の総時間数 42.3時間に対する百分率で表わして

表一I 行動分析による時間配分

項 目		%	計	
保 健 管 理	健康管理	処 置・指 導	25	57
		調 査・整 理	19	
		予 防 接 種	6	
		健 康 観 察	1	
		室 内 整 備	6	
安 全 管 理	校 内 巡 回	2	2	
保 健 組 織 活 動	生徒保健委員会	2	3	
	学校保健委員会	1		
保 教 育	保健学習	授 業	6	8
		授 業 の 準 備	2	
そ の 他		会 議	3	30
		部 活 動	13	
		そ の 他 の 職 務	7	
		休 け い	7	
計		100	100	